

「器は料理の着物」。器との出会いをきっかけに、食の世界を極めた北大路魯山人が残したことです。料理はぴったり合う器に盛りつけられたとき、一段とその味がうまくなる。そう魯山人は考えていたのでしょうか。

北大路魯山人は、書・てん刻・絵・陶芸・料理など、多彩な美を極めた芸術家です。自然界の美しさを師とし、生涯をかけて美を追求したといわれています。今では芸術作品になっていく、魯山人の器。しかし魯山人自身は、器は使つてこそ意味のある物と考えていました。



左の写真は、昭和十年代に作成した「雲錦大鉢」。土の

風合いを生かした素朴な器に、季節を表現するサクラとモミジが描かれています。魯山人は、この器にどんな料理を盛りつけていたのでしょうか。

市立美術館と市立博物館では、十二月十六日(日)まで「北大路魯山人展」を開催。陶器など約百五十点を展示しています。作品を鑑賞しながら、どんな料理が合うか考えてみる。そんな楽しみ方もできそうです。

川越ならではの礼儀作法など

## 小江戸のならわし・その八

### 昔の川越まつり

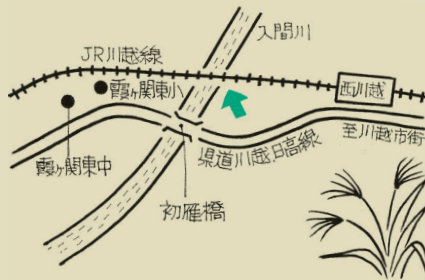
昔の川越まつりは、たいてい三、四年に一度ぐらいの間隔で行われていました。それだけに山車を出す年は大いに盛り上がったものです。家々に高張りちようちんを立て、横引きの紅白幕を張る軒端ぞろえで町を美しく飾り立てます。このような祭りの準備や後片づけは、町内頭の指揮の下、大勢のとび職によって、整然と行われていました。華やかな山車の曳き回しを満喫した翌日、通りを見るとすでに軒端はきれいに片付けられ、街路は祭りの跡を少しも残していませんでした。晴れの日とふだんの日を、きっちり折り目を付けるといふ、一種の美学を持っていたのでしよう。

\*文化財保護協会顧問・宮岡正一郎さん(みやおかしんいちろう)から伺った話を、広報室がまとめました。



### 表紙 初雁橋近くのススキ (小ヶ谷)

小春日和のさわやかな風にゆられるススキの向こうを、電車が走り抜けて行きました。



### 川越城築城550年記念

川越城が築城されて550年目のことし、さまざまな記念イベントを行っています